大学生における劣等感と補償の関連*

石　坂　昌　子・藤　森　愛　梨

The Relationship between the Inferiority Feelings and Compensations among Undergraduates

Masako Ishizaka・Airi Fujimori

問題と目的

人が社会の中で自分と他者を比べたり、今の自分と理想の自分を比べたりして、それよりも劣っていると感じて悩み、苦しむというような感情を劣等感と言う(友尻,2011)。誰もが抱くであろう感情だが、特に、青年期においては、第二次性徴やアイデンティティ追求の時期でもあり、身体的・精神的な変化が著しく起こるようになり、男女差や個人差など人との違いに敏感になっていくと思われる。また、現代では、受験や進路先、家庭環境や経済面という観点からも自分と他者との違いを意識し、多くの場面で他人と比べられるプレッシャーに思い悩むことが増えていくであろう。さらに、社会人へと移行する期間である大学生にとって、就職は重大な問題である。そのため、就職活動に関してもこの社会的なプレッシャーが劣等感への引き金となり、「自分自身を受け入れられない」、「認めたくない」、「こんな自分は嫌だ」というような自己嫌悪や抑うつ状態に陥ってしまう危険性がある。劣等感には人それぞれの要因が考えられるが、このような時期だからこそ「青年期は他の時期に比べ劣等感が強まる時期なのである」（返田，1986）と言われている。

これまで劣等感の実証的研究では、劣等感が生じる領域を分類した研究が多く、郷古（1972）は劣等感を環境的・性格的・能力的・身体的に分類し、安塚（1982）は、自己に対する劣等感や、家族・友人に対する劣等感など、劣等感を抱く対象についても検討している。また、岸田（1951）は、児童期から青年期にかけて強く感じられる劣等感の種類が変化することを指摘している。

なかでも髙坂（2008）は青年期における劣等感の発達的変化について研究を行っており、中学生では「学業成績の悪さ」、高校生では「身体的魅力がないこと」、大学生では「友達づくりの下手さ」に劣等感を抱くという結果が明らかになっている。大学生においては、自己の重要領域が中学生・高校生のように「他人に認められる」や「他人にみられる」ということよりも「自分自身を認める」や「自分自身を高める」ことに焦点化した領域に変化するとされており、そのため大学生では、「自分で自分自身を認める助けとなる友達をうまく作れないこと」が劣等感に繋がると髙坂（2008）は述べている。さらに、髙坂（2008）は、自己評価や自己認知から生じる感情が、自己の重要領域と関わっていると主張し、自尊感情と各発達段階で重要視されている劣等感の関連について取り上げている。それによると、大学生が友人関係の領域に対して最も強く劣等感を抱く理由として、自分自身が成熟するために、助けとなってくれる友達をうまく作れない場合に自尊感情が低くなり、それが劣等感を生じさせる要因となるため、大学生では「友達づくりの下手さ」に劣等感を抱きやすくなると考察している。しかし、劣等感は人にとってネガティブな働きをするばかりなのだろうか。この劣等感という感情を心理学の研究対象として取り上げたAdler（1932）は、劣等感があるからこそ、今の自己に対しての欠乏感を克服しようとする、というようなポジティブな捉え方をしている。そのためアドラー心理学では、劣等感は病気ではなく、「健康で正常な努力と成長への刺激である」(岸見,1999)とされており、「優れていることを目標とするということが最初にあって、その結果として劣等感を持つ」

（岸見, 1999）と考えるようになった。さらに、Adler（1932）は自分の弱点や欠点、あるいは劣等感を他の長所になる部分で補おうとする補償的側面に注目した。Allport（1937）はこのAdlerの劣等感の補償の概念に加え、困難の原因が除去されないために全く別の方向に満足を求める代償や、自分の当惑を隠そうとする仕草や態度などをとる防衛機制の他、自己弁護や合理化、自閉的思考（空想）などといった補償の形式の範囲があると考え、「直接的な適応の経路を通しては到達できない目標は、いろいろな補償的わき道を通して追求される」と主張した。また、宮城（1979）は、劣等感の補償には、強気や勝気の気性の要素が関わり、「攻撃的補償」や「運動暴発的補償」などの補償も挙げて、補償を意識的に行うものと無意識に行うものとに分けることができると述べた。つまり、自らの未熟な部分について自覚し、目標に向けて努力する補償は、劣等感のネガティブな働きを弱めることもでき、積極的に物事に取り組む動機をうみだす社会的にも有益なものである。しかし、自分の能力や努力では困難を乗り越えられず、挫折してしまった場合や現状を認められない場合には、先述したような防衛機制や合理化などの様々な補償をとることがあると推測される。

劣等感の補償については、友尻（2011）が実証的な研究を行っており、その結果、劣等感を感じやすい者の方は、本来の目標以外で認められることでは自分の価値を認められないため、防衛的行動に繋がる可能性が比較的高く、逆に劣等感をあまり感じない者の方が、本来の目標以外で認められることによっても自分の価値について認め、保つことができるため代償的行動をとる可能性が高いと示唆されている。しかし、友尻（2011）の研究では、細かく劣等感の各領域にどのような補償のパターンが生じるのかまでは検討されていない。

そのため、本研究では、劣等感の定義を「自分が他人よりも劣っているという感情」、補償を「劣等感を補うための感情または行動」と定義し、劣等感の領域ごとにどのような補償の特徴があるのかを大学生を対象に検討することとする。先述したように、大学生では特に「友達づくりの下手さ」に劣等感を抱いている（髙坂, 2008）。仮説として、友人関係の領域では、劣等感が強い者ほど防衛的行動、劣等感が弱い者ほど代償的行動を用いて補償を行うと推測する。

方　法

１．調査対象者

Ａ大学に在籍する学生180名を調査対象とした。回収されたデータ180名から記入漏れなどがあるものを除いた148名（男性34名、女性114名、平均年齢19.80、標準偏差1.04）のデータを分析対象とした。

２．手続き

2014年７月中旬にＡ大学の授業時間を利用して集団で質問紙調査を実施した。実施にあたっては、文章と口頭で調査の趣旨を十分に説明し、合意を得たうえで回答を求めた。また倫理的配慮として、調査への参加は任意であり回答の中断が可能であること、参加者に不利益が生じることはないこと、回答内容は調査以外で使用することはなく、個人情報は保護されることなどを質問紙表紙に記載し、口頭でも説明を行った。

３．調査内容

質問紙は、以下の内容から構成された。

(1)　個人属性

性別と年齢を尋ねた。

(2)　劣等感尺度

髙坂（2008）が作成した劣等感尺度を使用した。この尺度は劣等感が生じる領域を分類し、劣等感の程度を測定するためのものであり、中学生・高校生・大学生を対象とした尺度である。異性とうまくコミュニケーションがとれないことに対する劣等感を表す「異性との付き合いの苦手さ」（６項目）、自分の学業成績に対する劣等感を表す「学業成績の悪さ」（６項目）、自分の運動能力に対する劣等感を表す「運動能力の低さ」（６項目）、親や家庭環境に対する劣等感を表す「家庭水準の低さ」（６項目）、短気であるなど、自分の性格に対する劣等感を表す「性格の悪さ」（７項目）、友人とうまくコミュニケーションがとれないことに対する劣等感を表す「友達づくりの下手さ」（６項目）、人をまとめられないことに対する劣等感を表す「統率力の欠如」（５項目）、自分の身体的魅力に対する劣等感を表す「身体的魅力のなさ」（４項目）の８因子から構成され、計46項目である。各項目に対して「まったく感じない」（１点）から「とても感じる」（５点）までの５件法で回

答を求めた。

(3)　劣等感反応特性尺度

友尻（2011）が作成した劣等感反応特性尺度を使用した。この尺度は劣等感を感じたときにどのような反応がみられるか、補償行動に差異がみられるかを測定するためのものであり、大学生・大学院生を対象とした尺度である。劣等感を抱く対象について、努力して克服しようとするなどの考え方や行動を表す「努力志向性」（10項目）、劣等感を抱く対象については、なるべく触れないようにするなどの考え方や行動を表す「防衛反応」（６項目）、劣等感を抱く対象に向かって努力するのではなく、他に自分の得意とする分野で補うなどの考え方や行動を表す「代償志向性」（４項目）、劣等感を抱いたとしても、相手にそれを悟られないようにするなどの考え方や行動を表す「劣等感の表出抵抗」（４項目）、自分が劣っていることに執着しない考え方や行動を表す「劣等感の否認」（３項目）の５因子から構成され、計２７項目である。各項目に対して「まったく思わない」（１点）から「とても思う」（５点）までの５件法で回答を求めた。

結　果

１．測定尺度の検討

劣等感尺度の各回答の選択肢１から５までをそのまま得点化し、各因子の１項目あたりの得点の平均値と標準偏差を算出した。ただし、劣等感反応特性尺度も１から５までを得点化しているが、逆転項目に関しては逆に得点化を行い算出した（Table 1）。なお、本調査では因子に含まれる項目得点の総和を項目数で割ったものを因子得点平均値としている。

２．信頼性係数の検討

尺度の各因子の信頼性を確認するためCronbachのα係数を調べたところ、ほとんどの因子で.65以上の値を示し、信頼性が認められた（Table 1）。しかし、劣等感反応特性尺度の「劣等感の否認」因子については.26という値が得られたため、本研究では除外して分析を行った。また、「劣等感の表出抵抗」因子では.55という低い数値であったが、項目「相手に対して劣等感を抱いても、相手には自分の感情を悟られたくないと思う」を除外して、その他の「その人に対して悔しいと思っても、態度で相手に示すことはない」、「自分が相手よりできなくて悔しいときは、相手の前でも泣くことがある（逆転項目）」、「相手よりも自分の方が劣っていると気づいて悔しいときは、相手に自分の態度（泣くなどの行為、言動、表情などでも可）で悔しさを示す（逆転項目）」の項目で.70の信頼できる数値となったので、この３項目を用いて以下の分析を行った。

３．劣等感低群・高群の群分け

劣等感をあまり感じない者と強く感じる者の群分

Table 1　各尺度の因子得点の平均値と標準偏差およびα係数

	平均値	標準偏差	α係数
劣等感尺度			
第1因子「異性とのつきあいの苦手さ」	2.74	1.09	.93
第2因子「学業成績の悪さ」	3.29	1.10	.93
第3因子「運動能力の低さ」	3.09	1.08	.93
第4因子「家庭水準の低さ」	1.86	.74	.91
第5因子「性格の悪さ」	2.90	.92	.86
第6因子「友達づくりの下手さ」	3.00	.98	.87
第7因子「統率力の欠如」	3.09	.92	.87
第8因子「身体的魅力のなさ」	3.43	.92	.81
劣等感反応特性尺度			
第1因子「努力志向性」	3.50	.54	.79
第2因子「防衛反応」	2.75	.69	.81
第3因子「代償志向性」	3.51	.68	.71
第4因子「劣等感の表出抵抗」	2.86	.51	.70
第5因子「劣等感の否認」	3.26	.60	.26

（*N*=148）

Table 2　劣等感８因子における劣等感低群・高群の群分け得点範囲と人数

因子	劣等感低群得点範囲（人数）	劣等感高群得点範囲（人数）
第1因子「異性とのつきあいの苦手さ」	6～12（50）	19～30（47）
第2因子「学業成績の悪さ」	6～12（49）	24～30（51）
第3因子「運動能力の低さ」	6～15（55）	22～30（55）
第4因子「家庭水準の低さ」	6～8（57）	12～24（65）
第5因子「性格の悪さ」	7～17（55）	24～35（50）
第6因子「友達づくりの下手さ」	6～16（60）	21～30（51）
第7因子「統率力の欠如」	5～14（58）	17～25（60）
第8因子「身体的魅力のなさ」	5～12（60）	16～20（52）

けをするため劣等感尺度の８因子それぞれの合計得点をもとに３分割し、上位1/3を劣等感高群、下位1/3を劣等感低群として、群分けを行った（Table 2）。

４．劣等感各因子の補償行動の特徴

劣等感をあまり感じない者と強く感じる者とでは劣等感を感じる領域によってどのような補償の行動の差がみられるのかを検証するために、劣等感尺度８因子において劣等感反応特性尺度の劣等感低群・高群について t 検定を行った（Table 3～10）。

第１因子「異性とのつきあいの苦手さ」では、劣等感低群は「代償志向性」の得点が有意に高く（$t_{(95)}$=3.11, p<.01）、劣等感高群は「防衛反応」の得点が有意に高かった（$t_{(95)}$=3.09, p<.01）（Table 3）。

第２因子「学業成績の悪さ」では劣等感低群には「代償志向性」の得点で有意傾向がみられた（$t_{(98)}$=1.64, p<.10）。劣等感高群では「防衛反応」と「劣等感の表出抵抗」の得点が有意に高かった（$t_{(98)}$=3.59, p<.001; $t_{(98)}$=2.11, p<.05）（Table 4）。

第３因子「運動能力の低さ」では劣等感低群は「代償志向性」の得点が有意に高く（$t_{(108)}$=2.94, p<.01）、

Table 3　第１因子「異性とのつきあいの苦手さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝50	劣等感高群 n＝47	t値	結果
努力志向性	35.32 （4.00）	35.57 （7.09）	.22	*n.s.*
防衛反応	15.12 （3.63）	17.83 （4.95）	3.09**	低群＜高群
代償志向性	14.92 （2.39）	13.19 （3.05）	3.11**	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	11.42 （1.85）	11.72 （2.18）	.74	*n.s.*

（　）内は標準偏差，**p<.01

Table 4　第２因子「学業成績の悪さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝49	劣等感高群 n＝51	t値	結果
努力志向性	34.55 （7.17）	35.59 （4.12）	.89	*n.s.*
防衛反応	15.12 （3.66）	18.12 （4.61）	3.59***	低群＜高群
代償志向性	14.37 （2.84）	13.41 （2.96）	1.64†	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	11.02 （2.13）	11.92 （2.14）	2.11*	低群＜高群

（　）内は標準偏差，***p<.001，*p<.05，†p<.10

Table 5　第３因子「運動能力の低さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝55	劣等感高群 n＝55	t値	結果
努力志向性	34.18 （4.41）	35.89 （6.52）	1.61	*n.s.*
防衛反応	15.62 （3.72）	17.65 （4.93）	2.44*	低群＜高群
代償志向性	14.80 （2.55）	13.24 （3.01）	2.94**	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	11.25 （1.93）	11.60 （2.07）	.91	*n.s.*

（　）内は標準偏差，**p<.01，*p<.05

劣等感高群は「防衛反応」の得点が有意に高かった（$t_{(108)}$=2.44，p<.05）（Table 5）。

第４因子「家庭水準の低さ」では劣等感高群に「防衛反応」に有意な差がみられ（$t_{(120)}$=3.11，p<.01）、「劣等感の表出抵抗」での得点が有意傾向であった（$t_{(120)}$=1.88，p<.10）（Table 6）。

第５因子「性格の悪さ」では劣等感低群は「代償志向性」の得点が有意に高かった（$t_{(103)}$=1.99，p<.05）。劣等感高群は「防衛反応」と「劣等感の表出抵抗」の得点が有意に高く（$t_{(103)}$=2.77，p<.01；$t_{(103)}$=2.89，p<.01）、「努力志向性」では有意傾向がみられた（$t_{(103)}$=1.91，p<.10）（Table 7）。

第６因子「友達づくりの下手さ」では劣等感低群は「代償志向性」の得点が有意に高かった（$t_{(109)}$=3.50，p<.001）。劣等感高群は「防衛反応」と「劣等感の表出抵抗」の得点が有意に高く（$t_{(109)}$=4.03，<.001；t(109)=3.67，p<.001）、「努力志向性」に有意傾向がみられた（$t_{(109)}$=1.86，p<.10）（Table 8）。

第７因子「統率力の欠如」では劣等感低群は「代償志向性」の得点が有意に高かった（$t_{(116)}$=3.41，p<.001）。劣等感高群は「防衛反応」の得点が有意に高く（$t_{(116)}$=2.42，p<.01）、「劣等感の表出抵抗」は有意傾向がみられた（$t_{(116)}$=1.95，p<.10）（Table 9）。

第８因子「身体的魅力のなさ」では劣等感高群に「努力志向性」・「防衛反応」・「劣等感の表出抵抗」の得点が有意に高かった（$t_{(110)}$=2.98，p<.01；$t_{(110)}$=2.99，p<.01；$t_{(110)}$=2.02，p<.05）（Table 10）。

Table 6　第４因子「家庭水準の低さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝57	劣等感高群 n＝65	t値	結果
努力志向性	34.74 （4.56）	35.26 （6.61）	.50	*n.s.*
防衛反応	15.21 （4.01）	17.49 （4.10）	3.11**	低群＜高群
代償志向性	14.23 （2.75）	13.85 （2.66）	.78	*n.s.*
劣等感の表出抵抗	10.98 （2.32）	11.68 （1.75）	1.88†	低群＜高群

（　）内は標準偏差，**p<.01，†p<.10

Table 7　第５因子「性格の悪さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝55	劣等感高群 n＝50	t値	結果
努力志向性	34.24 （7.17）	36.38 （3.61）	1.91†	低群＜高群
防衛反応	15.55 （3.97）	17.86 （4.60）	2.77**	低群＜高群
代償志向性	14.64 （2.66）	13.56 （2.85）	1.99*	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	10.80 （1.75）	11.98 （2.41）	2.89**	低群＜高群

（　）内は標準偏差，**p<.01，*p<.05，†p<.10

Table 8　第６因子「友達づくりの下手さ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝60	劣等感高群 n＝51	t値	結果
努力志向性	34.07 （4.55）	36.08 （6.75）	1.86†	低群＜高群
防衛反応	15.12 （3.37）	18.21 （4.70）	4.03***	低群＜高群
代償志向性	14.98 （2.48）	13.22 （2.84）	3.50***	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	10.73 （1.76）	12.10 （2.16）	3.67***	低群＜高群

（　）内は標準偏差，***p<.001,†p<.10

Table 9　第７因子「統率力の欠如」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝58	劣等感高群 n＝60	t値	結果
努力志向性	34.43 （4.52）	35.98 （6.33）	1.53	*n.s.*
防衛反応	15.59 （3.65）	17.42 （4.51）	2.42**	低群＜高群
代償志向性	15.00 （2.55）	13.38 （2.60）	3.41***	低群＞高群
劣等感の表出抵抗	11.19 （2.06）	11.92 （2.00）	1.95†	低群＜高群

（　）内は標準偏差，***p<.001，**p<.01，†p<.10

Table 10　第８因子「身体的魅力のなさ」における劣等感低群・高群の反応特性の差

劣等感反応特性	劣等感低群 n＝60	劣等感高群 n＝52	t値	結果
努力志向性	33.78 （4.45）	36.94 （6.43）	2.98**	低群＜高群
防衛反応	15.43 （3.91）	17.87 （4.69）	2.99**	低群＜高群
代償志向性	14.27 （2.57）	13.90 （3.15）	.67	*n.s.*
劣等感の表出抵抗	11.05 （2.09）	11.90 （2.38）	2.02*	低群＜高群

（　）内は標準偏差，**p<.01，*p<.05

考　察

本研究は大学生における劣等感と補償の関連について着目し、劣等感をあまり感じない者と強く感じる者とで、劣等感の各領域で補償にどのような特徴や違いがあるのかを明らかにすることを目的とした。

１．尺度の信頼性の検討

尺度の各因子の信頼性を確認するためCronbachのα係数を調べたところ、劣等感反応特性尺度の「劣等感の否認」因子に低い値が認められた。「劣等感の否認」因子については、友尻（2011）の先行研究でもα＝.48の低い数値が出ており、さらに項目数が少ないことを理由に尺度として用いていないことから、本研究でも用いないことにして、分析を行った。

また、「劣等感の表出抵抗」因子については全４項目で値．55の低い数値であったが、項目の１つである「相手に対して劣等感を抱いても、相手には自分の感情を悟られたくないと思う」を除外し、残りの３項目で.70の信頼できる数値となったため、この３項目を分析に用いた。

２．全体的な劣等感の補償の特徴

全体的な劣等感の補償の特徴として、劣等感を強く感じる者は劣等感尺度のすべての因子で「防衛反応」の得点が有意に高かった。また、劣等感をあまり感じない者は後述する一部因子を除いて、「代償志向性」のみ得点が有意に高かった。これらの結果は友尻（2011）の劣等感を強く感じる者は防衛的行動をとりやすく、劣等感をあまり感じない者は代償的行動をとりやすいという見解と一致している。さらに、本研究の仮説として取り上げていた友人関係領域での劣等感の補償についても、劣等感をあまり感じない者は代償的行動で補償を行い、劣等感を強く感じる者は防衛的行動で補償を行うという仮説は支持された。友人関係以外の領域では、異性関係、学業成績、運動能力、性格、統率力の領域で仮説の友人関係の領域と同様に、劣等感をあまり感じない者は代償的行動で補償を行い、劣等感を強く感じる者は防衛的行動で補償を行うという結果がみられた。しかし、家庭水準や身体的魅力の領域では、劣等感をあまり感じない者と強く感じる者との間に「代償志向性」の有意な差はみられなかった。この点については、後述して考察する。

３．劣等感高群の補償の特徴

「学業成績の悪さ」、「家庭水準の低さ」、「性格の悪さ」、「友達づくりの下手さ」、「身体的魅力のなさ」の因子では劣等感を強く感じる者は、「防衛反応」だけではなく、「劣等感の表出抵抗」の得点も有意に高いことが示された。防衛反応とは、友尻（2011）によると自分が劣等感を感じる相手とは、核心の話題には触れないようにする、人と比べてできなくて悔しいときには無理にでも忘れようとするなどの行動のことである。また、表出抵抗とは、その人に対して悔しいと思っても態度には出さないなどの行動や思考をすることである。したがって、「勉強ができない」、「家庭に対して不満を持っている」、「つい悪口を言ってしまう」、「うまく友人関係がつくれない」、「かっこよくない、かわいくない」などの劣等感を強く感じる者は、「どうせ私にはうまくできない」などの否定的な感情を抱き、さらに、自分が劣等感を抱いている相手に対して、悔しいと思っていても泣くなどの態度で示すことはあまりないことが推測される。

また、「性格の悪さ」と「友達づくりの下手さ」の因子では、「防衛反応」と「劣等感の表出抵抗」とともに、「努力志向性」の有意傾向もみられた。友尻（2011）は、自分よりよくできる人を目標として努力したい、苦手だと思っても努力を続けて少しずつでも克服していくという行動や考え方が努力志向性であると述べている。「性格の悪さ」と「友達づくり

の下手さ」の因子の特徴は、「人を思いやることができない」、「仲の良い友人がつくれない」などといった、人間関係に関する劣等感の項目となっている。特に大学生においては、髙坂（2008）の先行研究でも指摘されているように、友人関係領域に劣等感を抱きやすく、学生にとって「ありのままの自分を受け止めてもらえるか」が深刻な問題である。そのため、友人関係において、「人の悪口を言わないように注意する」、「もっと積極的に自分から話しかけるようにする」などの努力で、より良い人間関係を築き上げることができるようになりたいという思いから、「努力志向性」に有意傾向がみられたと考えられる。

「身体的魅力のなさ」の因子では唯一「努力志向性」が有意傾向という結果ではなく、有意な差がみられた。「身体的魅力のなさ」で劣等感を強く感じる者の方が、「努力志向性」に有意差がみられたことについて、アドラー心理学が主張しているような、劣等感のポジティブな働きが表れたのではないだろうか。アドラー心理学では「劣等感が人間のあらゆる努力の源泉である」と概念化されており、「劣等性を感じることはふつうのことで、正常であり、行動への動機づけになるという意味では、役に立つもの」（Chew，1997）であるという捉え方をしている。Chew（1997）は、劣等感で苦しんだ結果として取られる方向によって、その行動が有益か有益でないかが決まると述べている。根本（1997）も「劣等感情から子どもは優越欲求を発達させる。優越欲求は子どもに意欲を生み出し、建設的な行動に向かわせる」と主張しており、劣等感を抱くことによって人にとってポジティブな働きがあることを述べている。そのため「身体的魅力のなさ」因子においても、劣等感のポジティブな働きがあったとも推測される。つまり、「身体的魅力のなさ」というのは他の劣等感因子よりも視覚的に捉えることのできるものであることから、「ダイエットをして細くなる」や「運動をして体を引き締める」など、努力の結果が目に見えやすく、やりがいを感じることができる因子であるため、「努力志向性」に有意な差をみることができたのではないかと推測される。

４．劣等感低群の補償の特徴

劣等感をあまり感じない者の特徴としては、「家庭水準の低さ」と「身体的魅力のなさ」のみに「代償志向性」の有意差がみられなかった。代償志向性とは、友尻（2011）によると、人よりできないことがあっても得意な分野で頑張りたい、他に自分ができることをする、などのような考え方や行動をおこすことである。第４因子の「家庭水準の低さ」では主に親に対する劣等感や家庭の環境に対する劣等感の項目内容から構成されている。そのため、劣等感を抱く対象は自分自身ではなく、親や周りの環境によって抱く劣等感であることが考えられるため、劣等感をあまり感じない者も強く感じる者もそれほど関係なく、「人よりできないことがあっても得意な分野で頑張りたい」という考え方をする代償志向性ではうまく補償を働かせることができなかったため、有意差がみられなかったと推測される。

また、第８因子の「身体的魅力のなさ」でも有意差がみられなかった。その理由としては、「身体的魅力」を補うために他の分野で努力をしても、「身体的魅力」が良くなるという結果には繋がりにくいため、第４因子の「家庭水準の低さ」と同様に代償行動での補償に有意な差がみられかったのではないかと推測される。また、落合（1989）は顔に対する劣等感の解消法についての先行研究において「自由記述の結果、誉められるといった他者からの評価の上昇や、劣ったものをみるといった他者との関係による解消もかなり多くみられた」と指摘している。髙坂（2009）の先行研究においても、容姿・容貌における劣等感が生じた場合には、「他者回避」、「直接的努力」、「他者攻撃」、「気晴らし」、「放置」、「賞賛・承認希求」、「代理補償」の７つの反応行動があることを指摘している。そのため、「身体的魅力のなさ」の因子では代償行動よりも他に、落合（1989）や髙坂（2009）が指摘している反応行動がみられる可能性がある。

５．今後の課題

髙坂（2008）の先行研究では、劣等感各因子いずれにおいても、劣等感は男性よりも女性の方が抱きやすいことが報告されている。本研究では、劣等感をあまり感じない者と強く感じる者で群分けを行い、それぞれの群で劣等感を抱いたときにどのような補償の特徴があるかを検討したが、男女の比率が均等でなかったため、各補償の特徴の性差については検討することができなかった。また、劣等感を抱いたときの補償を調べるために使用した友尻（2011）の劣等感反応特性尺度では「劣等感の否認」因子の信頼性が低かったため除外して、「努力志向性」、「防衛

行動」、「代償志向性」、「劣等感の表出抵抗」の４つの因子で分析を行った。「劣等感の否認」因子については、十分な信頼性が認められるように、項目の内容や項目数を見直す必要がある。さらに、友尻（2011）も、「努力志向性」を始めこの５つの補償行動の他に、容姿・容貌についての劣等感に対しては、髙坂（2009）が主張している「他者攻撃」や「気晴らし」、「賞賛・承認希求」などの反応行動を含めた尺度を検討する必要があることを指摘している。今回は、劣等感の各因子に対する補償行動の一部を分析することができたが、青年期における「身体的魅力のなさ」についての補償行動をより細かく分析するためには、髙坂（2009）などによる多様な反応行動を測定できる尺度を検討する必要があり、それも今後の課題としたい。

注

＊　本研究は藤森愛梨の平成26年度九州ルーテル学院大学卒業研究を再構成したものである。

文　献

Adler, A. (1932). W*hat life should mean to you*. Little, Brown: Boston, MA. （高尾利数（訳）(1984). 人生の意味の心理学　春秋社）

Allport, G. W. (1937). *Personality*. Henry Holt: New York. （詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正（訳）(1982). パーソナリティ―心理学的解釈　新曜社）

Chew, Alex L. (1997). *A Primer on Adlerian Psychology: Behavior Management Techniques for Young Children*. Humanics Trade Publication: Atlanta. （岡野守也（訳）(2004). アドラー心理学への招待　金子書房）

郷古英男（1972）. 非行少年にみる自信の欠如―不適応感・補償行動・非行化という観点から―　児童心理, 26(9), 124-129.

岸田元美（1951）. 児童における劣等性意識とその要因　児童心理, 5(9), 66-75.

岸見一郎（1999）. アドラー心理学入門―よりよい人間関係のために　ベストセラーズ

宮城音弥（1979）. 劣等感―その本体と克服―　東京書籍

根本橘夫（1997）. 劣等感をバネにする生き方　児童心理, 51(7), 592-598.

落合良行（1989）. 青年期にみられる顔に対する劣等感の分析　日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 31, 224.

返田健（1986）. 青年期の心理　教育出版

髙坂康雅（2008）. 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的変化　教育心理学研究, 56(2), 218-229.

髙坂康雅（2009）. 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連　教育心理学研究, 57(1), 1-12.

友尻奈緒美（2011）. 劣等感とその補償について―質問紙とTATを用いた調査より―　京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 211-224.

安塚俊行（1982）. 劣等感の構造(1)―予備的研究―　幾徳工業大学研究報告Ａ　人文社会科学編, ６, 15-19.